田端人

芥川龍之介

この度は田端の人々を書かん。こは必ずしも交友ならず。寧ろ僕の師友なりと言ふべし。

下島勲　下島先生はお医者なり。僕の一家は常に先生の御厄介になる。又空谷山人と号し、乞食俳人井月の句を集めたる井月句集の編者なり。僕とは親子ほど違ふ年なれども、老来トルストイでも何でも読み、論戦に勇なるは敬服すべし。僕の書画を愛する心は先生に負ふ所少からず。なほ次手に吹聴すれば、先生は時々夢の中に化けものなどに追ひかけられても、逃げたことは一度もなきよし。先生の胆、恐らくは駝鳥の卵よりも大ならん乎。

香取秀真(かとりほづま)　香取先生は通称「お隣の先生」なり。先生の鋳金家(ちうきんか)にして、根岸(ねぎし)派の歌よみたることは断(ことわ)るを必要もあらざるべし。僕は先生と隣り住みたる為、形の美しさを学びたり。勿論学んで悉(つく)したりとは言はず。且(かつ)又先生に学ぶ所はまだ沢山(たくさん)あるやうなれば、何ごとも僕に盗(ぬす)めるだけは盗み置かん心がまへなり。その為にも「お隣の先生」の御寿命(ごじゆみやう)のいや長(なが)に長からんことを祈り奉る。香取先生にも何かと御厄介になること多し。時には叔父(をぢ)を一人(ひとり)持ちたる気になり、甘つたれることもなきにあらず。

小杉未醒(こすぎみせい)　これも勿論年長者なり。本職の油画や南

画以外にも詩を作り、句を作り、歌を作る。呆れはてたる器用人と言ふべし。和漢の武芸に興味を持つたり、テニスや野球をやつたりする所は豪傑肌のやうなれども、荒木又右衛門や何かのやうに精悍一点張りの野蛮人にはあらず。僕などは何か災難に出合ひ、誰かに同情して貰ひたき時には、まづ未醒老人に綿々と愚痴を述べるつもりなり。尤も実際述べたことは幸ひにもまだ一度もなし。

鹿島龍蔵　これも親子ほど年の違ふ実業家なり。少年西洋に在りし為、三味線や御神燈を見ても遊蕩を想はず、その代りに艶きたるランプ・シエエドなどを見

れば、忽ち遊蕩を想(おも)ふよし。書、篆刻(てんこく)、謡(うたひ)、舞(まひ)、長唄、常盤津(ときはず)、歌沢(うたざは)、狂言、テニス、氷辷(こほりすべ)り等(とう)通ぜざるものなしと言ふに至つては、誰か唖然(あぜん)として驚かざらんや。然れども鹿島さんの多芸なるは僕の尊敬するところにあらず。僕の尊敬する所は鹿島さんの「人となり」なり。鹿島さんの如く、熟して敗(やぶ)れざる底(てい)の東京人は今日(こんにち)既に見るべからず。明日(みやうにち)は更(さら)に稀(まれ)なるべし。僕は東京と田舎(ゐなか)とを兼ねたる文明的混血児なれども、東京人たる鹿島さんには聖賢相親しむの情――或は狐狸(こり)相親しむの情を懐抱(くはいはう)せざる能(あた)はざるものなり。鹿島さんの再び西洋に遊ばんとするに当り、活字を以て

一言(いちげん)を餞(はなむけ)す。あんまりランプ・シエエドなどに感心して来てはいけません。

室生犀星(むろふさいせい)　これは何度も書いたことあれば、今更言を加へずともよし。只僕を僕とも思はずして、「ほら、芥川龍之介、もう好い加減に猿股(さるまた)をはきかへなさい」とか、「そのステッキはよしなさい」とか、入らざる世話を焼く男は余り外(ほか)にはあらざらん乎(か)。但し僕をその小言(こごと)の前に降参するものと思ふべからず。僕には室生(むろふ)の苦手(にがて)なる議論を吹つかける妙計(めうけい)あり。

久保田万太郎(くぼたまんたろう)　これも多言(たげん)を加ふるを待たず。やはり僕が議論を吹つかければ、忽ち敬して遠ざくる所は

室生と同工異曲なり。なほ次手に吹聴すれば、久保田君は酒客なれども、（室生を呼ぶ時は呼び捨てにすれども、久保田君は未だに呼び捨てに出来ず。）海鼠腸を食はず。からすみを食はず、況や烏賊の黒作り（これは僕も四五日前に始めて食ひしものなれども）を食はず。酒客たらざる僕よりも味覚の進歩せざるは気の毒なり。

北原大輔　これは僕よりも二三歳の年長者なれども、如何にも小面の憎い人物なり。幸にも僕と同業ならず。若し僕と同業ならん乎、僕はこの人の模倣ばかりするか、或はこの人を殺したくなるべし。本職は美術

学校出の画家なれども、なほ僕の苦手（にがて）たるを失はず。只僕は捉（とら）へ次第、北原君の蔵家庭（ざうかてい）を盗（ぬす）み得るに反し、北原君は僕より盗むものなければ、畢竟得（ひつきやうとく）をするは僕なるが如し。これだけは聊（いささ）か快とするに足る。なほ又次手（ついで）につけ加へれば、北原君は底抜けの酒客（しゆかく）なれども、座さへ酔（ゑ）うて崩（くづ）したるを見ず。纔（わづか）に平生の北原君よりも手軽に正体を露（あらは）すだけなり。かかる時の北原君の眼はその俊爽（しゆんさう）の色あること、画中の人も及ばざるが如し。北原君の作品は後代恐らくは論ずるものあらん。然れども眼は必ずしも論ずるものありと言ふべからず、即ち北原君の小面憎（こづらにく）さを説いて酔眼（すゐがん）に至

る所以なり。

（大正十四年二月）

底本：「筑摩全集類聚　芥川龍之介全集第四巻」筑摩書房
　　　１９７１（昭和46）年６月５日初版第１刷発行
　　　１９７９（昭和54）年４月10日初版第11刷発行
入力：土屋隆
校正：松永正敏
２００７年６月26日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。